

びくきこえさせ給へれど、年比にもならせ給ぬ、みやたちあまたおはします宣耀殿こそまづ
 さやうにはおはしませ、内侍のかみの御事はおのづから心のどかになどそうさせ給へば、
 いどけうなき御心也、この世をふさはしからず思ひたまへるなりなと、糸じの給はすれば、さ
 よき日してこそは宣旨もくださせ給べかなれとそうして、出させ給てにはかにこの御事ども
 の御よういあり、なに事もそれにさはり日なとのべさせ給べき御世の有さまならねば、二月十
 四日きさきにゐさせ給とて、中宮ときこえさす、いそぎたせ給ぬ、その日になりぬれば、つねの
 ことながらもいみじくやむことなくめでたし、略中御とし十九ばかりにぞおはしましける、參
 らせ給て三四年ばかりにぞならせ給ぬらんかしとぞおしはかりまうす人々あり、大宮后彰子
 は十二にてまゐらせ給て、十三にてこそきさきにゐさせ給けれ、されど此御前はすこしおとな
 びさせ給にけり、略中やがて大饗いとどうせさせ給べし、大夫には大殿の御はらからのよろづ
 のわにぎみの大納言なり給、おほがたみやづかさなとみなえりなさせ給、かくていとめでたう
 ふたどころさしつゝきておはしますを、よのためしにめぐらかなることにきこえさす、うちに
 はいまは宣耀殿の女御の御ことを、いかでかとおぼしめせど、すがやかに殿にはまうさせ給は
 ぬ程に、宣耀殿にはなにもおぼしめしたぬ程に、大かたの女房のえんくにつきて、さど人
 のおもひのまゝにものをいひおもふは、いかにいかに、おまへに覺しますすらん、あさましき世中
 にはべりや、これはさべきことかはなと、いとさかしがほにとぶらひまゐらす人々なとある
 を、此ふみをも又かうなん、それかれは申つるなと、かたり申す人を、女御殿はなと、かうむづか
 しいふらん、たといふ人ありとも、かたうでもわれかし、こゝにはよろづ思ひたえて、いまは
 たゞ後の世の有さまのみこそわりなけれなと、物まめやかにおほせらるれば、さこそあれ御心
 のひがまさせ給へれば、物のあはれありさまをもまらせ給はぬとさかしうきこえさせける、かゝ